編集後記

第115回日本医史学会総会・学術大会を福岡県太宰府市の九州国立博物館で迎えることになった．準備のために奔走されている会長のミヒェル先生を始め，関係される先生方のご努力に深く感謝したい．日本医史学会は，昨年の総会において，長年にわたり学会を支えてこられた酒井シヅ先生が退任され，新たに小曽戸洋先生が理事長に就任された．新しい体制での初めての総会・学術大会となる．学会の構成員も徐々に世代交代をして，新しい時代へ向けての船出となる．編集委員会としても，学会の発展のためにできる限りの貢献をしていきたい．

医史学は，歴史上の医学・医療を扱う学問分野であり，同じものごとを研究対象とし続けているが，研究の蓄積によって発展し続けている．さらに近年の医学・医療は大きく変貌しつつある．ここ10年，20年の間に，医学・医療ができることはきわめて大きくなり，それとともに医学・医療に求められることも大きくなった．精密な画像診断の登場によって，体内の病変の位置・形状が手に取るように分かるようになり，血液や身体機能の検査によって病状や身体の状態が正確に評価できるようになった．数十年前には，病気の診断がつかず不幸な結果になったとしても，医師が最善を尽くしたと言えば許されたかも知れない．現在では，病気の原因や状態さらに予後までもが詳細に把握され，治癒ないしコントロールすることが医師に要求され，それができなければ医師は非難されることになる．

E・H・カーが『歴史とは何か』で述べたように，歴史は現在と過去の対話である．現在の医学・医療はここ数十年の間に大きく変貌し，医史学者が描く医学の歴史もかつてと同じではない．現在，そしてこれからの時代の中で，「日本医史学雑誌」を通じて，会員の方たちとともに新しい医史学を作り上げていきたいと願う．

（坂井　建雄）